

東アジア文化研究科
令和4(2022)年度

東アジアにおける王爺祭の研究 —海洋博物館の展示と意義—

邢 繼萱

論文要約

近代以来、社会構造の発展と科学技術の進歩に伴い、世界各地における発展の重心は、大陸から海洋、特に海洋資源を持つ地域と領域へと移行しつつある。海洋産業、海洋科学、海洋環境、海洋文化などの領域に関する諸課題が世界的な範囲において徐々に注目され、世界各国が海洋資源の開発に積極的に取り組んでいることは明らかで、人類に対する海洋の重要性や、人類社会と海洋の関連性を全体的に考えるべき時代を迎えたと思われる。つまり、人間社会の発展が徐々に海洋を焦点化しているといっても言いすぎではない。人類生活は、古来、海洋と密接な関係があるが、とくに最も典型的な海洋活動は「漁業」と「航海」である。このような海洋活動を円滑に行うため、沿海地域における自然の地勢に従って風や浪を防いで、船舶が安全に航行停泊し、人々の乗降や荷役を行う港湾は、人類の海上活動の集中地であり、海洋文明・文化の発祥地でもあって、それは沿海都市の興起にも関わると考えられる。中国、日本、台湾にまたがる東アジア海域は、一つの海洋を囲んで諸国や諸民族の関係が取り結ばれる海域である。12世紀以降、中国海商が海上貿易を展開し、その刺激を受けていた東アジア沿岸の国や民族との貿易活動が盛んに行われ、東アジア海域で暮らす各民族の間に緊密な通交圏ができて、特別な海洋文化が形成されてきた。このような歴史的背景において発展した海洋文化の一つが海洋信仰による王爺信仰、すなわち「王船祭」である。「王船祭」とは、主祭神の王爺を祭る廟宇が主催し、境内のいたるところの疫病や害を退散させるため、「建醮」が行われた後に、王爺像などの祭祀用道具を搭載する「王船」を海上に流しながら燃え尽くす祭祀儀式である。「王爺祭」の儀式では、宗教信仰という内容のほかに、伝統的な民俗芸術や儀式用品の歴史と伝承も含め、民衆生活の典型的な文化的特色がよくわかる。また、各地に漂着した「王船祭」は、独特の地方文化、社会環境と融合し、文化や地域性などの個性的な要素をもつ多様な儀式と風貌を生み出して、人心を強固に凝集させる力となった。

人類の活動の痕跡、国家ひいては世界の珍宝と見られる「文化遺産」のイメージといえば、人類の活動の足跡として残された歴史的建築物のような遺跡、すなわち、有形の具体的な実物資料を思い浮かべるに違いない。しかし、各国や各地域、また各民族にとっては、祝祭などの無形の民俗文化も、自らの文化的象徴であり、誇りうる遺産として扱われている。これらは無形の「文化遺産」の一部、人類共通の貴重な財産である。グローバル化の進展と共に、文化の多様性という感覚は、世界的な範囲で広く意識されているが、とくに各地の文化の根元をなす無形の民俗文化の保護の重要性

が国際社会で注目されている。その理由は、無形文化が一度失われると、二度と取り戻すことができない、という民俗文化の特性によるものである。近年、民俗文化の技芸保持者の高齢化及び継承者の不足等の状況により、王爺祭と同じように、消滅の危機に瀕している無形民俗文化が数多くあり、それらが衰退していつている。無形の民俗文化の保存に対する認識が必要と考えられ、その保存と振興は、緊急の課題だと考えられている。

そこで、本論には、王爺信仰から誕生した「王爺祭」を具体的な東アジアにおける海洋文化の一例とし、その内容と伝承を検討する。そのために、東アジア各地における「王爺祭」の歴史や発展などの受容状況と、各地の博物館による当地の民俗文化を代表する「王爺祭」に対する展示現状を考察する必要があると考えている。ゆえに、本論文において第一部の「東アジアにおける王爺祭概要」については東アジア地域、特に中国・台湾・日本の三地における「王爺祭」伝播の背景切り口として、「王爺」の起源と王爺祭の特色という両方面から全般的に王爺祭の歴史を研究する。まず、東アジア地域における「王爺祭」伝播の背景を巡って、王爺信仰の内容と王爺祭の起源を解明した上で、歴史的な王爺信仰の背景、地域による儀式の過程、各博物館における王爺祭の展示という3つの方面から台湾、中国、日本三つの地域における王爺祭を考察する。中国起源である「王爺祭」の風習は、17世紀ごろから海上貿易の規模の拡大とともに盛んになった華人の移民活動によって、相次いで日本と台湾、さらに東南アジアに広がった。各地に広がった「王爺祭」は、独特の地方文化や社会環境と融合し、文化や地域性などの個性的な要素を持つ多様な儀式と様相を生み出した。それでも、これまで代々伝承され、一世を風靡した王爺文化による「王爺祭」の生命力は、徐々に縮小していくことを否定しにくい。現代社会において衰弱した民俗文化の生命力を延ばし、改めて生気を充溢させることは、王爺祭の伝承について研究する価値でもある。現在の視点からいって、王爺祭の開催は、地方の集団凝集性が高められることのみならず、観光客を招いて当地の経済力を強くさせる旅行資源として扱われる。歴史の変遷とともに、信者による民間信仰の需要と団体活動の参与は、王爺祭の王爺信仰を一つの文化意識に進展させた。そして、このように形成された文化意識は、民間信仰を介して人間自身に影響を与える。王爺祭などの民俗的風習から、民間文化や民間信仰の実態だけではなく、人間社会における「いのち」に対するより深い探求と思考をみななければならない。

王爺祭などの民俗文化を後世に受け継いでいくため、民俗文化にとって主な宣伝舞台とされる博物館の力は不可欠と思われる。博物館とは、人類の文明の成果を保存する研究機能と、情報や研究成果に基づいて、一般市民に普及させる教育任務を負っている施設である。現代、科学技術の進歩により、伝統的な博物館から派生した「デジタルミュージアム」においては、実物の展示に限らず、コンピュータなどのデータ処理装置を用いて、情報媒体を活用すると同時に、展示内容をデジタル化するのが展示の特徴である。一般市民に海洋文化を展示の形で開示している教育施設として、海洋博物館は海洋文化に関する情報や研究成果に基づき、海洋文化を普及させるという任

務を担っている。そのために、海洋博物館の展示内容や展示方式は極めて重要で、各年齢層にわたる観客による知的な要求に応じるためには、博物館の展示は理解しやすい方式でなければならず、展示内容においても高い水準を保つのみならず、観客が海洋文化に関する知的な関心や興味もそそられるような施設でなければならないと考えられる。そのため、本論の第二部は「博物館における海洋文化の展示と王爺祭」をテーマとし、まず博物館現在の展示動向と海洋文化の展示現状の両方面から博物館における海洋文化の展示状況を究明し、また台湾海洋科学博物館を一例として、「博物館の展示構成」、「海洋文化展示と王爺祭」および「観客による展示分析」三つの角度から全面的に総合型海事博物館の実態分析を行い、さらにこれらの研究結果を踏まえながら「実物とマルチメディアの同時展示」と「シナリオと認知学習」に基づき、「王爺祭」の展示についての基本構想を提出する。これまでの展示研究によって、王船祭の展示を本論の課題として探求してみた。どのように展示するのが良いかの定説はない。そこで、本論において博物館学の観客研究を基礎とし、博物館の観客を対象とするシャドーイング調査を行い、観客の行動や評価を項目や指標によってそれぞれ分析した。また、このようにして得た観客のデータを博物館機能の評価への参照とした。そうした観客の行動によって、デジタル化の展示方式に対す観客の意向や満足度が予測できるようになる。調査した結果によると、博物館における観客のデジタル化展示への満足度は、いずれも高かったのである。この結果、展示のデジタル化が、伝統な展示方式では伝えられない抽象的な内容を観客に理解しやすい方式で展示できることが論証された。同様の展示場所においては、伝統的な展示手段に比べると、デジタル化展示による展示内容は、より一層豊富で、展示物に関わる文化の風貌を全面的に観客へ伝達できるようになる。すなわち、デジタル化展示の展示効果は、単なる実物展示の解説よりも優れていると言える。時代の発展によって変化した観客の生活習慣に応じて、展示のデジタル化は、博物館にとって避けられないことになるであろう。つまり、博物館は、民俗文化を発展させる主要な主役として、また、民俗文化に関する正確な知識を普及させる教育機構として、民俗文化に対して地域の連携を推進しながら、地域コミュニティの構築や地域経済の促進など、地域社会の構造を効果的に構築するためにも重要な役割を果たすことができるであろう。

要約すると、本論は、東アジア地域の「王船祭」を中心に、海洋博物館の展示現状を考察しながら、海洋博物館における海洋文化、特に「王船祭」の展示を踏まえて、王船祭のような海洋民俗文化をどのように保存すべきかを探求し、「王船祭」についての踏み込んだ意義の解明と、博物館におけるその展示の可能性について核心的な議論を提示したものである。